



日本形成外科手術手技学会

# News Letter

第15号 2020年7月7日発行  
発行 日本形成外科手術手技学会 事務局  
〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-12  
新宿ラムダックスビル 榊春恒社内  
jsitps@shunkosha.com

## — 目次 —

- \* 理事長からのご挨拶
- \* 第25回 日本形成外科手術手技学会 報告
- \* 第26回 日本形成外科手術手技学会 お知らせ
- \* 学術集会予定

## 理事長からのご挨拶

日本形成外科手術手技学会 理事長 櫻井 裕之  
(東京女子医科大学形成外科)

日本形成外科手術手技学会は、形成外科内視鏡手術研究会として1996年に設立して以来四半世紀の節目を迎えようとしています。内視鏡手術は、体腔内の臓器を専門とする外科領域においては革新的な技術として発展し、手術の“低侵襲化”をキーワードとして急速に普及しました。

発足当時の本学会は、その内視鏡技術の導入を主目的としていましたが、主に体表を扱う形成外科手術における適応範囲は限定的であり、臓器別専門外科領域に見られるような大きなインパクトを与えることはありませんでした。一方で、この間に内視鏡以外にも、多種多彩な先端技術が開発されました。再生医療、画像データを駆使したナビゲーション、血流・リンパ流の視覚化、高解像度画像ディスプレイ、創管理、・・・等々、これらは形成外科手術を、より低侵襲で、より安全で、より精度の高いものに変えてゆく可能性を秘めています。ですが同時に、新技術を形成外科手術に活用するためには、その技術を最適化するための新たな手技が求められます。

この四半世紀の間に、形成外科内視鏡手術研究会は、形成外科内視鏡・手術手技研究会、形成外科手術手技研究会、と名称変更を重ね日本形成外科手術手技学会へと発展してきました。その過程は、形成外科手術への新技術導入において、営々と築き上げてきた手術手技にさらなる工夫の積み重ねが必要であることを再認識した過程と捉えることができるのではないのでしょうか。

伝統ある本学会の理事長という大役を拝命し、身の引き締まる思いであります。先達が築いてきた本学会の充実と更なる発展を目指して、会員の皆様と力を合わせて、前進していきたく存じます。皆様の暖かいご支援ご協力を賜りますよう、何とぞ宜しくお願い申し上げます。

## 第25回 日本形成外科手術手技学会 報告

会長 深水 秀一（浜松医科大学医学部附属病院形成外科）

この度、本年2月8日（土曜日）にアクトシティ浜松コンgressセンターにおきまして第25回日本形成外科手術手技学会を開催させていただきました。コロナウイルスなどの感染症が流行り始めており、参加者が少なくなるのではと危惧していましたが、幸い天候に恵まれ、スタッフを含めて300名という多くの方に参加していただきました。私どものような歴史の浅い教室に学会開催をお任せいただきましたことを、あらためて会員の皆様に深く御礼申し上げます。

さて、本学会のテーマは、形成外科の手術について、いつも私が感じていることから「ART and TECHNOLOGY」としました。ARTには「芸術、美術」という意味の他に「技、技巧」という意味がありますが、いずれにしても熟練した技術を示す言葉です。加えて、今回は「クリエイティブな感性」を強く意識しています。一方、TECHNOLOGYは科学的知識を用いて開発された機械類や道具類を意味します。形成外科の手術手技におきましては、まさにARTとTECHNOLOGYの融合が重要と考え、このテーマを選びました。

このテーマに沿って、特別講演は静岡理工科大学名誉教授で物理学者の志村史夫先生をお招きし、「IT・AI 時代に求めたい医療」という演題でご講演いただきました。志村先生には、古代の建築技術などに関する著書がたくさんありますが、私が最も好きな著書は、「一流の研究者に求められる資質」です。今回はこれを医療者へのメッセージとしてお話しいただきました。また教育講演は、本学の教育・産学連携担当理事で副学長の山本清二先生に「光技術を用いた診断・治療」について、そして日本医師会常任理事で形成外科医の松本吉郎先生に「医師の偏在や働き方改革」についてご講演をお願いしました。いずれのご講演も大変反響があり、質問も多く出ていました。

またシンポジウムは、私が多くの先生に聞いてみたいと思っているケロイド、眼瞼痙攣、皮膚腫瘍の治療法を取り上げ、ご経験の豊富な先生方に討論していただきました。会場内でも熱いディスカッションがなされていました。

さらに、ハンズオンセミナーとして、「マイクロサージャリー」および「デジタルツールで描く手術シエマ」の2つを企画しました。これらも大変人気のあるセミナーとなりました。

一般演題では、座長の先生方に抄録を読んでいただき、あらかじめ点数をつけていただきました。これをもとに当日の発表を私たち主催者が聞いて、学会の終わりに3名の優秀賞を選びました。座長の先生方には大変ご負担をおかけしました。

欲張りすぎて、1日にこなすにはかなり盛りだくさんな内容になりましたが、実りのある学会になったと自負しています。本学会を無事、成功裏に終えることができましたことは、学会員の皆様、協賛企業の皆様、同門の先生方、そして教室員全員のおかげです。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

## 第 26 回 日本形成外科手術手技学会 お知らせ

会長 岡崎 睦（東京大学大学院医学系研究科 形成外科学分野）

この度、第 26 回日本形成外科手術手技学会を東京大学形成外科学教室が担当させていただくことになり、会員の皆様に心より御礼申し上げます。

会期は 2021 年 2 月 5 日（金）午後から 6 日（土）で、会場は一橋大学一橋講堂（千代田区一ツ橋 2-1-2 学会総合センター内）です。皇居の北側で東京駅の北西約 1.3km に位置し、最寄りの駅は地下鉄東西線竹橋駅（徒歩 3 分）ですが、多くの地下鉄駅からアクセス可能で便利な場所です。この学会は通常は 1 日での開催ですが、近年演題数も増加傾向にあり、1 日のみの日程では少し窮屈になってきている現状や、ビデオ演題を多く取り入れたいと考えたことから、1 日半での開催とさせていただきました。2014 年の第 19 回の本学会は（名古屋大学の主催で会長は亀井譲先生）2 日間の会期で開催されましたので、2 日間は今回が初めてではありません。少し長い会期で手術手技を堪能していただければと考えております。

本学会のテーマは、「五感を生かす」としました。手術自体は視覚を使って手で行うものですが、嗅覚、聴覚、触覚（味覚は??）を使う場面も多いと思われまので、これらについて語り合う企画も考えております。日本語としては「五感を活かす」が正しいのかも知れませんが、私の感覚では「生かす」であり、これはまた「患者さんの五感を生かす（五感を温存した再建する）」という意味も表現しています。今年は、年初からコロナウイルス禍に見舞われ、現在、多くの学会が中止や延期を余儀なくされています。夏季にはいったん収まっても、来冬の再燃が懸念されますが、会員の皆様方には「参加して良かった」と思っていただけの学術集会となりますように、教室員一同準備を進めて参りますので、多数のご参加を心よりお待ちしております。

---

### 学術集会予定

#### 第 26 回日本形成外科手術手技学会

会 長：岡崎 睦（東京大学大学院医学系研究科 形成外科学分野）

会 期：2021 年 2 月 5～6 日（金曜午後～土曜）

会 場：一橋大学一橋講堂（千代田区）

テーマ：五感を生かす

H P：<http://jsitps2021.umin.jp/>

#### 第 27 回日本形成外科手術手技学会

会 長：三川 信之（千葉大学大学院医学研究院 形成外科学）

会 期：2022 年 2 月 19 日（土）

会 場：ホテル ザ・マンハッタン（千葉市）